SDGsへの言語学的接近
―計量テキスト分析と日韓対照研究から―

新　井　保　裕*

［要旨］本稿では、世間の注目度が高いSDGsに対して、言語学から接近した。「SDGsにはさまざまな言説があるが、それはなぜか」、「日本語のSDGsはどのような言語構造を持ち、どのような機能を備えるか」という2つの研究課題を、それぞれ計量テキスト分析と日韓対照研究の観点から考察した。結果、本来の目標・ターゲットとは乖離した言説の存在と背景や、日本語SDGsに反映される日本語の言語構造及びそれに伴う機能変化の可能性を示唆した。言語学の観点から、これまで見えてこなかったSDGsの一面が明らかになり、言語学の意義も示した。

１．はじめに

‘SDGs’とは‘Sustainable Development Goals’の略で、日本語では「持続可能な開発目標」を表す[1)]。2015年の国連総会で全加盟国が合意し、2030年までにそのような社会を実現していくことを目指している。17のゴールと169のターゲットから成り、人間（People）、繁栄（Prosperity）、地球（Planet）、平和（Peace）、パートナーシップ（Partnership）の5つのPにまとめられる。SDGsは社会からの注目が非常に高い共通の目標であるだけでなく、学術的にも注目され多くの研究成果が発表されている[2)]。一方で、筆者が専門とする言語学においてはあまり注目されていないのが実情である[3)]。実際、SDGsの17ゴール、169ターゲット日本語訳の中にも「ことば」や「言語」という表現は含まれておらず、SDGsと言語学は関係がないように思われる。しかしSDGsを取り巻く言説や日本語訳を見る限り、言語学から接近することで見えてくるSDGsの姿があるのではないかと推察される。そこで本稿では、世間の注目を集めるSDGsに、計量テキスト分析や日韓対照研究という言語学の観点から試験的に接近することで、SDGsに新たな知見を与えることを目的とする。さらに言語学の意義についても示すことを狙いたい。

２．計量テキスト分析からの接近

２．１．SDGsを取り巻く言説

電通の第6回「SDGsに関する生活調査」によると[4)]、SDGsの認知率（「内容まで含めて知っている」「内容はわからないが名前は聞いたことがある」）は9割を超え、9割弱がポジティブな印象（「とても良い印象」「良い印象」「どちらかというと良い印象」）を持っているという。さらに約8割が、SDGsに対して企業が積極的に取り組むと、良い印象が強くなる、好感度が上がるな

＊准教授／韓国朝鮮語学・社会言語学

どの影響があると回答している。このようにSDGsに対する日本国内の肯定的な意見の数と相関するように、SDGs関連の書籍も日本で多数出版されており[5)]、やはり世間的な注目度は高いと言うことができる。

一方で、SDGsには「金儲け」「金目当て」という否定的な意見も少なくない。代表的なものとして、以下のようなX（旧Twitter）上のツイートが挙げられる[6)]。一著名人のツイートであるが、ツイート公開から1年半で7000件を超える「いいね」がクリックされており、SDGsに対する否定的な意見に少なくない数の賛同が寄せられていることがわかる。

図１　SDGsに関する否定的なツイート例

このようにSDGsを取り巻く言説には、肯定と否定という相反するものが存在することが確認される。本稿はこうした意見の是非を問うものではなく、「SDGsにはさまざまな言説があるが、それはなぜか」を研究課題にし、言語学からの接近を通じて解を与えようとする。

２．２．計量テキスト分析

２．１節で確認した通り、SDGsにはさまざまな言説がある。そしてそうした言説を検討するにあたり、それぞれの言説でどのような単語が用いられているか、どのように用いられているかを分析することで、言説を比較し、客観的な基準で分析考察できるのではないかと考える。そこで本稿では、言語学の知見が活用されている計量テキスト分析（Quantitative Text Analysis）を用いて言説の分析を行う。計量テキスト分析とは具体的に以下のものである。

(1) 計量テキスト分析

計量テキスト分析とは、インタビューデータなどの質的データ（文字データ）をコーディングによって数値化し、計量的分析手法を適用して、データを整理、分析、理解する方法である。

（秋庭・川端2004: 235-236（樋口2014: 13より再引用））

本節では、以下2種類のテキストデータに対して、計量テキスト分析を行う。

(2) 本稿の分析テキストデータ

A. SDGsの目標及びターゲットの日本語訳（A4で14枚程度、約14000字）

B. SDGsを扱った書籍の紹介文（A4で19枚程度、約19500字）

AについてはSDGsの17目標、169ターゲットを一覧で掲載している、一般社団法人イマココラボのウェブサイト内該当ページ[7]よりテキストを抽出して、文書ファイル化した。次にBについては以下要領で作成した。まずショッピングサイトAmazon日本版（amazon.co.jp）の検索において「SDGs」と検索し（2022年6月1日実施）、「アマゾンおすすめ商品」として出力された検索結果のうち、スポンサー商品を除いて、上位1ページ目に出た書籍39冊（出力された雑誌やDVDは除く）の紹介文[8]を抽出し、文書ファイルでまとめた。

こうして得られた2種類のテキストデータを分析するソフトウェアとしてはKH Coderを用いる。KH Coderとは具体的に以下のものである。

(3) KH Coder（https://khcoder.net/）[9]

樋口耕一氏（立命館大学）が開発し、公開している計量テキスト分析のフリー・ソフトウェア。分析のチュートリアルや事例については樋口（2014）、樋口・中村・周（2022）に詳しい。

ここではKH Coderを用いて前掲の2つの資料を分析し、その結果を比較する。SDGs本来の目標及びターゲットと、関連書籍の紹介文に異同があるかどうかを確認し考察することで、さまざまな言説があることの理由や背景がわかるのではないかと考えられる。

２．３．結果及び考察

KH Coderではさまざまな計量テキスト分析が可能であるが、ここではそうした分析結果のうち、頻出語、共起ネットワークに注目して、その結果を観察し、考察を行う。

２．３．１．頻出単語

KH Coderではテキスト文書を形態素解析し、形態素の出現頻度を出力できる。形態素解析とは以下のようなものである。

(4) 形態素解析

文を、意味の最小単位である形態素ごとに分割する解析作業。

KH Coderでは作業者が、特定の形態素が組み合わさったものを語として抽出できるなど、語

に注目した分析も可能である。語には、名詞や動詞など実質的な意味を持つ実質語と、助詞や接続詞など文法的な意味を持つ機能語があるが、当該文書の実質的な意味内容に関わる実質語に本研究では注目する。異なる資料の頻出実質語の結果を比較することで、その資料の内容の特徴を明らかにすることができる。実際にKH Coderを用いてSDGsの目標及びターゲットの日本語訳、SDGsを扱った書籍の紹介文の両資料を分析し、頻出実質語をまとめると以下表の通りになる。

表1　頻出実質語（上位10語、括弧内は頻度）

	SDGsの目標及びターゲット日本語訳		SDGsを扱った書籍の紹介文
1位	開発途上国（77）	1位	SDGs（168）
2位	可能（63）	2位	世界（71）
3位	持続（63）	3位	企業（49）
4位	全て（42）	4位	目標（41）
5位	開発（38）	5位	社会（36）
6位	アクセス（36）	5位	未来（36）
7位	技術（35）	7位	ビジネス（30）
8位	強化（34）	8位	年（27）
9位	促進（32）	9位	経営（26）
10位	能力（29）	9位	本書（26）

SDGsの目標及びターゲット日本語訳においては「開発（途上国）」「技術」関連の語が上位に来る一方で、SDGsを扱った書籍の紹介文では「世界」「ビジネス」関連の語が上位にあるという結果が現れ、各資料でよく用いられる語に異なりがあることが計量的に明らかになる。さらに頻出語だけではなく、語と語の間の共起の度合い（どの語がいっしょに出やすいか）を見ることで両資料の相違が明らかになるのではないかと考える。

２．３．２．共起ネットワーク

KH Coderでは語と語の共起度合いを示す共起ネットワークも分析結果として出力可能である。共起ネットワークの詳細、及びKH Coderで行える作業は以下の通りである。

(5) 共起ネットワーク（樋口2014、樋口・中村・周2022の内容を抜粋要約）

出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク。また、比較的強く結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって示す「サブグラフ検出」もKH Coderは行う。

ここでもKH Coderを用いて前掲の2つの資料を分析し、出力された共起ネットワーク図を比較する。頻出語だけでなくネットワーク図の異同を観察することによっても、さまざまな言説

があることの理由を究明できる可能性がある。

実際に両資料の計量テキスト分析を通じて、出力された共起ネットワーク図は以下図の通りである。

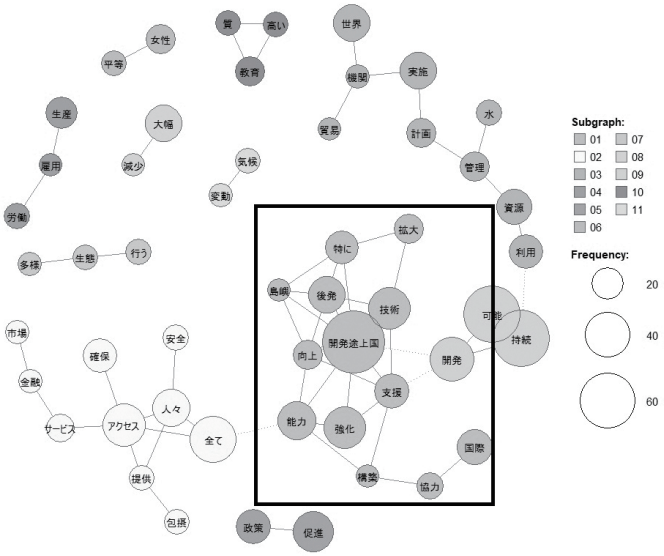

図２ 「SDGsの目標及びターゲット日本語訳」共起ネットワーク

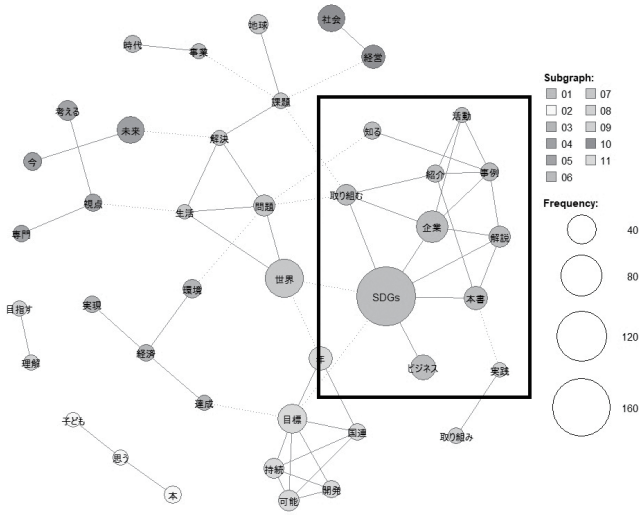

図３ 「SDGsを扱った書籍の紹介文」共起ネットワーク

まず「SDGsの目標及びターゲット日本語訳」のテキストデータから出力された共起ネットワーク図を観察する。こちらで最も主要なサブグループとなっているのは、「開発途上国」「支援」「強化」を中心にしたグループである。一方で「SDGsを扱った書籍の紹介文」のテキスト

データから出力された共起ネットワーク図では、「企業」「SDGs」「取り組み」を中心としたグループが最も主要なサブグループとして検出された。頻出語だけでなく、共起の度合いからも両資料には異なりがあることが確認される。SDGsを扱った書籍の紹介文では、SDGsの目標及びターゲットとは異なった語が中心的に用いられ、また共に出る語の組み合わせも異なる。SDGs関連書籍では、SDGs本来の目標・ターゲットとは異なるアピールが成されていると言える。実際の紹介文例を見ていく。

(6) SDGsを扱った書籍の紹介文一例（下線は本稿筆者）

今年いちばんのビジネスキーワード・SDGsとは「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称。国連が策定した17の目標（ゴール）と169のターゲットで構成されています。本書は「いまさら聞けないSDGsの基本」から始まり、SDGsに取り組む企業のインセンティブと意義についてサプライチェーン＆バリューチェーンの視点からわかりやすく解説。「投資を呼び込む」「ビジネスチャンスを拡大する」「企業の知名度を向上させる」「採用に強くなる」など、ビジネスとSDGsを両立させている事例も合わせて紹介します。

(6) の例からもわかるように、実際に「ビジネス」「企業」という語が頻出し、「SDGs」ということばと強い結びつきで共起していることわかる。そしてこの傾向は、SDGs本来の目標及びターゲットには見られないものである。SDGs関連書籍は、SDGsという国際共通目標を企業活動、ビジネスに応用するための指南書として書かれているものが多い。そのため、「ビジネス」「企業」という語がよく現れ共起するのは当然のことであると言えるが、一方で、そうした関連書籍の出版を通じてビジネスの側面が過度に強調されてしまうのも事実である。さらに、ビジネスの側面を強調することで関連書籍がますます多く出版されるとも言える。こうした循環的な過程を通じて、ビジネスの側面に焦点を当てた、本来とは別の言説が生まれ、「金儲け」「金目当て」とSDGsが捉えられるようになると考えられる。

本節では「SDGsにはさまざまな言説があるが、それはなぜか」を研究課題にしてSDGsを取り巻く言説を分析した。「SDGsの目標及びターゲット日本語訳」、「SDGsを扱った書籍の紹介文」を対象にKH Coderで計量テキスト分析した結果、両者が頻出語や共起ネットワークで異なる傾向を示しており、相反するさまざまな言説が存在することを示した。一部はビジネスを過度に強調するため、SDGs本来の目標・ターゲットとは乖離した「金儲け」「金目当て」と捉える言説が生まれていることが示唆された。このように言語学の知見を活かすことで、SDGsを取り巻くさまざまな言説の存在が確認され、その背景が明らかになったと言える。

３．日韓対照研究からの接近

３．１．SDGs 目標の日韓語訳

SDGsは国際共通目標であり、世界的公用語である英語から各言語に翻訳されている。前節では「SDGsの目標及びターゲット日本語版」を分析テキスト資料として用いたが、起点言語（Source Language）である英語から、目標言語（Target Language）である日本語に翻訳した際に、翻訳意図が反映され、国際共通目標でありながらも、SDGsの英語オリジナルとは異なるものになることがある。例えば、目標14の「LIFE BELOW WATER（水面下の生命）」は外務省訳で「持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する」というものであったが、アイコンではステークホルダーや市民への浸透を念頭にして「海の豊かさを守ろう」と行動を促すことばで呼び掛ける、簡単な表現になった（蟹江2020: 6-7）。ただし日本語のSDGsの目標を見ると、上記の翻訳意図だけでは説明できず、日本語の言語構造や言語戦略が反映されたものもあるのではないかと考えられる。そこで本節では「日本語のSDGsはどのような言語構造を持ち、どのような機能を備えるか」を研究課題とし、日本語SDGsに言語学的観点から接近する。その際、日本語と類似していると考えられる韓国語との対照研究の視座も入れて分析及び考察を行っていく。本節で実際に分析対象となる日韓両語のSDGs目標及び英語オリジナルは以下の通りである。

表２　日韓SDGs及び英語オリジナル

	日本語	英語	韓国語
1	貧困をなくそう	NO POVERTY	빈곤층 감소와 사회안전망 강화 （貧困層減少と社会安全網強化）
2	飢餓をゼロに	ZERO HUNGER	식량안보와 지속가능한 농업 （食料安保と持続可能な農業）
3	すべの人に 健康と福祉を	GOOD HEALTH AND WELL-BEING	건강하고 행복한 삶 보장 （健康で幸福な生活保障）
4	質の高い教育を みんなに	QUALITY EDUCATION	모두를 위한 양질의 교육 （みんなのための良質の教育）
5	ジェンダー平等を 実現しよう	GENDER EQUALITY	성평등 보장 （性平等保障）
6	安全な水とトイレを 世界中に	CLEAN WATER AND SANITATION	건강하고 안전한 물관리 （健康で安全な水管理）
7	エネルギーをみんな にそしてクリーンに	AFFORDABLE AND CLEAN ENERGY	에너지의 친환경적 생산과 소비 （エネルギーの親環境的生産と消費）
8	働きがいも 経済成長も	DECENT WORK AND ECONOMIC GROWTH	좋은 일자리 확대와 경제성장 （良い働き口拡大と経済成長）
9	産業と技術革新の 基盤をつくろう	INDUSTRY, INNOVATION AND INFRASTRUCTURE	산업의 성장과 혁신 활성화 및 사회기반시설 구축 （産業の成長と革新活性化並びに社会基盤施設構築）
10	人や国の不平等を なくそう	REDUCED INEQUALITIES	모두 종류의 불평등 해소 （全ての種類の不平等解消）

11	住み続けられる まちつくりを	SUSTAINABLE CITIES AND COMMUNITIES	지속가능한 도시와 주거지 조성 （持続可能な都市と居住地組成）
12	つくる責任 つかう責任	RESPONSIBLE CONSUMPTION AND PRODUCTION	지속가능한 생산과 소비 （持続可能な生産と消費）
13	気候変動に 具体的な対策を	CLIMATE ACTION	기후변화와 적응 （気候変化と適応）
14	海の豊かさを守ろう	LIFE BELOW WATER	해양생태계 보전 （海洋生態系保全）
15	陸の豊かさも守ろう	LIFE ON LAND	육상생태계 보전 （陸上生態系保全）
16	平和と公正を すべての人に	PEACE, JUSTICE, AND STRONG INSTITUTIONS	평화 정의 포용 （平和正義包容）
17	パートナーシップで 目標を達成しよう	PARTNERSHIPS FOR THE GOALS	지구촌 협력 강화 （地球村協力強化）

３．２．日韓対照研究

本節でSDGs目標の日本語訳を言語学的に分析するにあたり、日韓対照研究の視点を取り入れる。日韓対照研究とは日本語と韓国語の対照研究を指すが、本３．２節では対照研究について簡単な説明を行う。対照言語学や対照言語学的研究について、先行研究で以下のように定義される。

(7) 対照言語学とは、二つ、あるいは、二つ以上の言語について、音、語彙、文法等の言語体系、さらには、それらを用いる行動である言語行動のさまざまな部分をつきあわせ、どの部分とどの部分とが相対応するか、あるいは、しないかを明らかにしようとする言語研究の一分野であると定義されよう。（石綿・高田1990: 9）

(8) 対照言語学的研究（対照研究（contrastive study））は、複数の言語体系を比較し、その異同から対象とする諸言語の特徴を明らかにしようとする。（生越2002: 1）

特に、日本語と韓国語は世界の言語の中でも最も類似したものであると言われる。しかし言語構造が完全に同一であるということはない。むしろ日本語と韓国語を対照研究し、「小さな」違いを明らかにすることで、各言語の「大きな」特徴を把握できるとも言える。本節でも日本語、韓国語それぞれの分析だけでなく、日韓対照研究の視点を取り入れてSDGs目標を言語学的に分析する。

３．３．結果及び考察

本研究では、まずSDGs目標の日本語訳に現れる構文類型を分析し、さらに韓国語訳のそれと対照することで、両言語の言語構造の特徴が反映されることを確認する。さらに英語オリジナル及び韓国語訳には見られない日本語訳の言語戦略についても考える。

表３　構文類型別日本語SDGs

	日本語	勧誘形式	助詞止め	名詞止め
1	貧困をなくそう	○		
2	飢餓をゼロに		○	
3	すべの人に健康と福祉を		○	
4	質の高い教育をみんなに		○	
5	ジェンダー平等を実現しよう	○		
6	安全な水とトイレを世界中に		○	
7	エネルギーをみんなにそしてクリーンに		○	
8	働きがいも経済成長も		○	
9	産業と技術革新の基盤をつくろう	○		
10	人や国の不平等をなくそう	○		
11	住み続けられるまちつくりを		○	
12	つくる責任つかう責任			○
13	気候変動に具体的な対策を		○	
14	海の豊かさを守ろう	○		
15	陸の豊かさも守ろう	○		
16	平和と公正をすべての人に		○	
17	パートナーシップで目標を達成しよう	○		
		7例	9例	1例

３．３．１．日本語の構文類型

英語オリジナルのSDGs目標では17の目標がすべて名詞（句）であるのに対して、日本語のSDGsは名詞（句）以外でも表現され、むしろ名詞（句）以外よりも多い。構文別にまとめると、次のように勧誘形式（「動詞＋よう」）、助詞止め（「名詞＋に、を、も」）[10]、名詞止め（「名詞（修飾表現）＋∅」）に三分される。

行動を促すことばで呼び掛ける、簡単な表現に翻訳されたことは前述したが、行動を促すことばで呼び掛けるならばいずれも勧誘形式で終結すればよいところを、半数以上は助詞止め、名詞止めを用いているところが興味深い。英語オリジナルではいずれも名詞（句）で表現されていることとは対照的である。助詞止め、名詞止めという形式だけでは、本来の形式上では行動を促す機能は備えないと考えられる。行動を促すことを目的とした日本語SDGsでなぜ助詞止め、名詞止めが多用されるのであろうか。

尹盛熙（2016）は欧米のTVドラマシリーズの日本語翻訳字幕における省略・縮約に注目している。本稿同様に日本語翻訳を対象にした研究であるが、日韓対照の視点も取り入れており、

日韓の字幕を比較した結果、日本語の方が文字数・情報量共に少なく、省略の度合いが多い傾向があるが、情報内容を減らす以外に、文の成分や文法要素を削って短さを実現していることを述べている。そして縮約の形式は下記のように「助詞止め文」、((9))「名詞止め文」((10)) の2種類で実現されると指摘している。

(9) なぜここに？／でも見て見ぬふりを。
(10) もう我慢の限界。／オペ室の予約。　（尹盛熙2016より一部引用）

本研究の分析対象となる日本語SDGs目標においても助詞止めが最も高い比率を占めており共通している。字幕では主に劇中人物の発話を翻訳されるため、話しことばの文体であるが、日本語SDGsでも、それを目にした人たちに行動を促すように話しことばの文体で表現されて、同様の縮約形式が用いられていると言える。つまり、話しことばで助詞止めが勧誘表現として機能する日本語の言語構造が日本語SDGsにも反映されている。

一方で名詞止め文については日本語SDGsでは1例しか現れなかった。今後より仔細な研究が必要となるが、助詞止めと名詞止めという2つの縮約形式にも、相手の行動を促す勧誘の機能については異なりがあり、助詞止めの方が勧誘の機能が強いと言えるかもしれない[11]。

３．３．２．韓国語の構文類型

次に韓国語SDGsの構文類型について考える。韓国語は17の目標すべてが名詞止めで現れており英語オリジナルと共通する一方で、次のように「目的語成分名詞＋動名詞（～（を）―)」、「名詞（表現）＋名詞（表現）(～と―)」、「名詞修飾表現（～な―)」に三分される[12]。

表４　構文類型別韓国語SDGs

	韓国語	目的語成分名詞＋動名詞	名詞（表現）＋名詞（表現）	名詞修飾表現
1	빈곤층 감소와 사회안전망 강화 (貧困層減少と社会安全網強化)		○	
2	식량안보와 지속가능한 농업 (食料安保と持続可能な農業)		○	
3	건강하고 행복한 삶 보장 (健康で幸福な生活保障)	○		
4	모두를 위한 양질의 교육 (みんなのための良質の教育)			○
5	성평등 보장 (性平等保障)	○		
6	건강하고 안전한 물관리 (健康で安全な水管理)			○
7	에너지의 친환경적 생산과 소비 (エネルギーの親環境的生産と消費)		○	

8	좋은 일자리 확대와 경제성장 （良い働き口拡大と経済成長）		○	
9	산업의 성장과 혁신 활성화 및 사회 기반시설 구축 （産業の成長と革新活性化並びに社会基盤施設構築）		○	
10	모두 종류의 불평등 해소 （全ての種類の不平等解消）	○		
11	지속가능한 도시와 주거지 조성 （持続可能な都市と居住地組成）	○		
12	지속가능한 생산과 소비 （持続可能な生産と消費）			○
13	기후변화와 적응 （気候変化と適応）		○	
14	해양생태계 보전 （海洋生態系保全）	○		
15	육상생태계 보전 （陸上生態系保全）	○		
16	평화 정의 포용 （平和正義包容）	○		
17	지구촌 협력 강화 （地球村協力強化）	○		
		8例	6例	3例

日本語では名詞止めよりも助詞止めが多かったのに対して、韓国語ではさまざまな類型の名詞止めが現れた。類似していると言われる日本語と韓国語で異なる構文類型の訳が用いられるのだろうか。ここでは日韓対照研究のうち、生越ほか（2018）やArai（2021）で提案される「「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語」という言語構造の違いに注目して考える。

生越ほか（2018）やArai（2021）では言語単位の独立性・従属性・結合性・融合性に注目し、日本語は言語単位の独立性が高く全体から外して結合できる一方で、韓国語は言語単位の従属性が高く互いに融合できることことから、それぞれの言語構造を磁石、チェーンに例えている。図示化すると以下の通りである。

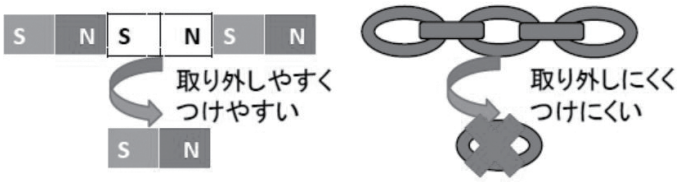

図４ 「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語

この言語構造の違いからSDGs目標の日韓両語訳の違いを考える。「磁石」な日本語では、行動を促すことばで呼び掛けるSDGsの目標でも、呼び掛ける動作を表す動詞が外され、助詞止

めや名詞止めで表現されていると解釈することができる。一方、韓国語のSDGsはすべてに名詞止めが用いられ、日本語以上に縮約が多いように一見されるが、「目的語成分名詞＋動名詞（～（を）―）」、「名詞修飾表現（～な―）」のように、動名詞を用いて動作を言語化していたり、修飾表現を用いて名詞の性質を言語化していたりする。省略は非常に少なく「チェーン」な構造が活かされていると言える。また「名詞（表現）＋名詞（表現）（～と―）」についても、そこで用いられる名詞表現を見ると、前述の2類型に当てはまる。３．３．１節の結果と合わせても、SDGs目標の日本語訳及び韓国語訳にはそれぞれの言語の言語構造が反映されていることがわかる。

３．３．３．日本語訳の言語戦略

最後に、SDGs目標の日本語訳に見られる言語戦略について見る。目標15は「陸の豊かさも守ろう」と訳されるが、ここではとりたて助詞の「～も」が用いられる。「～も」は累加を表すとりたて助詞であり、文中のある要素をとりたてて、同類のほかのものにその要素を付け加えるという意味を表す（日本語記述文法研究会2009: 20）。SDGsのオリジナルでは、それぞれの目標が独立しており、互いの目標に対する指示や言及はない一方で、日本語訳の場合は目標14の「海の豊かさを守ろう」を前提として、海に加えて陸という要素を付け加えていることが、とりたて助詞「～も」の使用から推察される。日本語と類似した韓国語にもとりたて助詞に相当する副助詞があり「-도」が累加を表すが、これまでにも見てきた通り、韓国語訳ではこうした表現は用いられていない。

このように日本語SDGsでは他言語のものとは異なり、個々の目標を独立したものとしてではなく、連続かつ結束したものとして見せ、行動を促すことばで呼び掛ける翻訳をしていると言える。翻訳意図が反映された、日本語とりたて助詞を用いた言語戦略である。

本節では「日本語のSDGsはどのような言語構造を持ち、どのような機能を備えるか」を研究課題にして、日本語SDGsに言語学的観点から接近し、特に日韓対照研究の視点を取り入れた。その結果、行動を促すことばで呼び掛けることを意図とした日本語版SDGsでは勧誘形式だけでなく助詞止めや名詞止めが用いられ、特に助詞止めによる勧誘機能が強いことが明らかになったほか、日本語の「磁石」な言語構造が反映されていること、そして累加のとりたて助詞を用いた言語戦略が行われていることもわかった。韓国語訳においても「チェーン」な言語構造が反映されている。国際共通目標であるSDGsが翻訳される際に、その言語の特徴が反映され得ることが示され、目標が持つ機能が変わる可能性もある。「言語が思考を規定する」サピア・ウォーフの仮説を見てもわかるように、国際共通目標のSDGsについて考える際もその翻訳目標言語（本稿では日本語）について考える必要があることが示唆される。

４．おわりに

本稿では、世間の注目が高いSDGsに対して、言語学から接近し、SDGsをこれまでとは異な

る視点で捉えようとした。「SDGsにはさまざまな言説があるが、それはなぜか」、「日本語のSDGsはどのような言語構造を持ち、どのような機能を備えるか」という研究課題を設定し、それぞれ計量テキスト分析と日韓対照研究の観点から考察した。結果、前者については本来の目標・ターゲットとは乖離した、ビジネスを過度に強調した言説の存在と背景を明らかにしたほか、後者についても日本語SDGsには日本語の言語構造が反映され、目標が持つ機能が変わる可能性を示唆した。言語学の観点から、これまで見えてこなかったSDGsの一面が明らかになったと言えるだろう。

SDGsという国際共通目標は汎用性が非常に高いものであるが、そのラベリングにより、本来のものとは乖離した言説の登場、目標言語の構造による機能変化が起こる可能性がある。SDGsという標語によって注目が集まり関心も高くなる一方で、共通の標語の設定により、個々の事例が見えづらくなったり零れ落ちたりする、あるいは意図しない標語利用が成されることもある。例えるならば、個々の特徴的な商店が散在する地域にショッピング・モールやアーケードが設置され、そこにそうしたお店が含まれることで地域全体が注目される一方で、個々の商店が見えづらくなると言えよう。

しかし本稿はSDGsそのものの賛否を問うものでは決してない。ただどんなに優れた取り組みであっても、その表層だけを見て深層を理解しなければ、本来の取り組みの趣旨とは異なる方向に物事が進む可能性を指摘する。我々はことばという物事の表層だけに注目を集めがちであるが、そのことばの背後にある深層を見ていかなければならない。そしてそうした姿勢を持つことに言語学は大きく寄与するものと考える。本稿におけるSDGsへの言語学的接近は試験的なものではあったが、本稿を通じて言語学の意義も示せたならば幸いである。

付記

本研究はJSPS科研費（16H03413、21H05522）の助成を受けて行われたものの一部である。また本稿は、2022年度文京学院大学生涯学習センター・大学院外国語学研究科連携講座『SDGsを映像・データから読み解く』で筆者が担当した「ことばの研究・教育から見るSDGs」の内容に加除修正を加え原稿化したものである。発表機会を与えてくださっただけでなく、発表に対して貴重なコメントをくださった、外国語学研究科委員長代行（当時）の甲斐田万智子先生に深く感謝したい。もちろん本稿における分析、考察は筆者の見解であり、誤りはすべて筆者に帰するものである。

注

1） SDGsに関する記述は蟹江(2020)や南・稲場(2020)を参照してまとめた。

2） 日本の論文、図書・雑誌や博士論文、研究データ、プロジェクト情報などの学術情報で検索できるデータベース・サービスCinii Research（https://cir.nii.ac.jp/）で2022年6月28日に検索を行ったところ、「SDGs ビジネス」は435件、「SDGs 社会」は1969件、「SDGs 経営」は719件の検索結果が得ら

れた。そのすべてが学術的先行研究ではないが、一定の研究成果が出ていることがわかる。

3）注2と同様の方法で検索を行ったところ、「SDGs 言語」の検索結果は54件であり、そのほとんどが教育に関連するもので、SDGsを主分析対象とした言語研究は皆無であった。

4）https://www.dentsu.co.jp/news/release/2023/0512-010608.html（2023年5月12日公開、2023年7月19日閲覧）

5）ショッピングサイトAmazon日本版(amazon.co.jp)の本カテゴリーで2022年6月28日に「SDGs」と検索した際、9000件以上の結果が現れた。

6）https://twitter.com/IiyamaAkari/status/1480809458288984069（2022年1月11日公開、2023年9月21日閲覧）

7）https://imacocollabo.or.jp/about-sdgs/17goals/（2022年6月28日閲覧）

8）各書籍紹介ページの、価格より下に書かれた説明文のことを本稿では指す。ただしただ目次が追加されているだけのものや、電子書籍への説明、売り上げへの説明、出版社・推薦者のコメントは、本の内容説明に直接関わらないため省いた。一方で、著者のコメントは直接的な説明と言えるため、含めている。

9）2023年7月19日閲覧

10）1例副詞止めが含まれるが（目標7）、「～に」という形式で終わること、及び前半部で「みんなに」という助詞止めが用いられ、対になっていること考えられることから助詞止めに含めた。

11）尹盛熙(2016: 30)でも「字幕同様、強い制約が働く日本語の新聞見出しでは、助詞が一般の談話とは異なる意味を帯びることがあり、例えば「～を」は「呼びかけ」などの意味合いを持つとされる（「政府は志を新たに出直しを」など。野口2002）」と述べている。「～に」「～に～を」について述べられ本稿と共通する部分も多いが、本稿の日本語SDGsでは「～も～も」の構文も用いられている。今後、助詞全体及び各助詞の機能、話しことばと書きことばの文体の違いについてもより詳細に検討したい。丸山(2022)も参照のこと。

12）例えば目標1の「빈곤층 감소와 사회안전망 강화（貧困層減少と社会安全網強化）」は「貧困層（を）減少」、「社会安全網（を）強化」の意味であるため、「目的語成分名詞＋動名詞」にも当てはまるように思われるが、それら名詞表現が並列されたものであるため「名詞（表現）＋名詞（表現）」に類型化している。他の例についても同様の操作で類型化し実例数を数えた。

参考文献

秋庭裕・川端亮（2004）『霊能のリアリティへ―社会学、真如苑に入る』新曜社（樋口（2014）より再引用）

石綿敏雄・高田誠（1990）『対照言語学』おうふう

生越直樹（2002）「対照言語学の展望」生越直樹編『対照言語学』、1-7、東京大学出版会

生越直樹・尹盛熙・金智賢・新井保裕（2018）「省略現象から見えてくることー「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語ー」『社会言語科学会第42回大会発表論文集』、236-245、社会言語科学会

蟹江憲史（2020）『SDGs（持続可能な開発目標）』中央公論新社（中公新書）

野口崇子（2002）「「見出し」の“文法”―解読への手引きと諸問題」『講座日本語教育』第38分冊、94-124

日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法５　第9部とりたて　第10部主題』くろしお出版

樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版

樋口耕一・中村康則・周景龍（2022）『動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニング―フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析』ナカニシヤ出版

丸山直子（2022）『書き言葉と話し言葉の格助詞』ひつじ書房

南博・稲場雅紀（2020）『SDGs―危機時代の羅針盤』岩波書店（岩波新書）

尹盛熙（2016）「日本語の翻訳字幕における省略・縮約の実現―韓国語との対照分析」『社会言語科学』18巻2号、19-36

Arai Yasuhiro（2021）‘‘Magnet’-type Japanese and ‘Chain’-type Korean（1）: A New Perspective of a Contrastive Study between Japanese and Korean’『文京学院大学外国語学部紀要』20号、1-15

（2023.9.21 受稿 , 2023.11.13 受理）